



パウダーを滑る



大阪大学コミュニケーションデザイン・センター助教

平井 啓 (ひらい けい)

1997年、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程を中途退学後、大阪大学人間科学部助手、国立がんセンター東病院外来研究員、バクスター株式会社研究顧問などを経て、現職。専門は健康心理学、サイコオンコロジー。

目の前が真っ白だ、口と鼻にどんどん雪が入ってくる。さらに雪の深いところでターンすると頭まで雪をかぶってしまった。止まりたい。止まれない。「Keep going!」というガイドのチャックの音がする。でももう限界だ。足に力が入らない。転ぶしかない。転んだ！ 視界が真っ白で何も見えなくなった。

これは、北海道の大雪山系にある旭岳でスキーをしているときの私の実験の経験です。内陸にある旭岳に降る雪は軽く、腰くらいまでが雪に埋まるような深雪の斜度30度くらいの斜面を泳ぐように滑ることができます。少しでも深い、そして軽い新雪「パウダー」を求めて、私は年に1～2度旭岳に通っています。パウダーとは文字通り粉雪のことですが、さらに「誰も滑っていない斜面」という意味でも使います。そんな斜面を探して、板を担いで斜面に登ったり、木々の生い茂る林の中に入ったりします。

通常、日本でのスキー・スノー



パウダースノー

ボードというとスキー場の圧雪された斜面を滑るスポーツです。通常、スキー場の斜面はロープに囲われ、その外には「立ち入り禁止」の看板があります。日本ではこのように管理された斜面を「美しく滑る」ことに価値がおかれてきました。ところが、海外のスキー場では、規制があるのはよほど危険なところで、多くのスキーヤーやスノーボーダーは、滑っている格好など気にせずさまざまな斜面に果敢に挑戦していきます。この5年くらいの間、彼らの多くが日本のスキー場にやってきてゲレンデの外に出ていくことで、新しいスキー・スノーボードの楽しみ方を広げるのに貢献してくれています。

私が、こうしたパウダースキーに出会ったのは、2001年にスイスのツェルマットにスキーに行った時のことです。私にとってその時が初めてのヨーロッパのスキー場だったため、現地の日本人がやっているガイド会社にガイドをお願いしました。その会社のテーマがまさに「パウダースキー」で、参加者は、好むと好まざるとにかかわらず、パウダー斜面にばかり連れて行かれました。ガイドさんは「僕らはパウダーのあるところはガイドしますが、コースはガイドしませんよ」と言っていました。その時体験したのは、だれも滑って

いないパウダーの斜面を滑ると、他では味わえない独特の浮遊感を味わえるということ、未知の斜面に飛び込むことのドキドキ感です。このスイスでのスキーをきっかけに、私はすっかりパウダースキーの魅力にとりつかれてしまいました。それから現在まで、日本国内でもパウダーで滑れるスキー場を探し、いろんな山に出かけました。雪中行軍で有名な八甲田山や、黒部立山、上越の関温泉、そして冒頭でご紹介した旭岳です。

このようにたいへん楽しい経験ができる一方で、パウダーでスキーを楽しむ、ゲレンデの外に出るということは、あらゆるリスクを自分たちで背負うこととなります。万が一雪崩に遭遇して、だれかが雪に埋まっても短時間で助け出せるように、ビーコンと呼ばれる発信機を付ける必要があります。そこで通常は、山に詳しく雪崩に対する知識をもったガイドに案内を依頼します。冒頭に出てきたチャック氏は北海道で活躍するオーストラリア人のガイドさんですが、カナダでアバランチコントロール（雪崩対応）の資格を取得されています。

心理学的にいうと、私は「手つかずのパウダースノーの斜面での快楽」というとても強い強化子により、ガイド料を払うというリスクマネジメント行動やパウダーに強い道具の購入行動、斜面に登るといふ行動すらも強化されてしまっており、再びパウダーのある斜面に向かうことになるのです。